

患者から医師へのシグナル

・第76回・

仕事が好き、それが何よりの張り合い

渡邊 正直

約10年前に COPD と診断

私は現在82歳ですが、最初に慢性閉塞性肺疾患(COPD)と診断されたのは70歳代の時で、きっかけは脳の硬膜下血腫の手術でした。ある日、新宿で法事がありけっこうな量のお酒を飲んだ私は、帰りに駅の階段を踏み外し、後ろに頭から転倒してしまいました。一緒にいた親戚が言うにはかなり大きな音がしたそうで、私は「大丈夫」と言って一度は仕事場に帰ったのですが、どうも体調がおかしく、吐き気も覚えたことから聖路加国際病院を受診しました。即刻入院となり、頭蓋骨にドリルで穴を開けて血腫をとる手術を実施。手術をするにあたって行った検査でCOPDを指摘されま

した。その時、診療して下さった先生に「いつか在宅酸素療法(HOT)が必要になるでしょう」と言われていましたので、それなりに悪かったのだと思います。実際にその頃から、自宅近くの駐車場に車を停めてから家まで徒歩12~13分の距離がきつくなっていました。息切れをして、上り坂では休まないと帰れないようになってきていたのです。先生にはタバコが原因の1つだと言われ、1日に2箱半ほど吸っていたタバコをきっぱりやめました。

聖路加国際病院への通院は続けていましたが、2012年4月24日の晩、千葉県の自宅で倒れ東京女子医科大学八千代医療センターに救急搬送されました。倒れた本人は「一晩寝たら治るだろう」く

……▶ SIGNALS FROM PATIENT TO DOCTOR * No.76 ……▶ SIGNALS FROM PATIENT TO

らいに思っていたのですが、先生に言わせれば死んでいてもおかしくない状態だったということです。それからは呼吸器内科の桂 秀樹先生にお世話になっています。その後も同様に倒れて2回入院していますので、桂先生は正に私の命の恩人ですね。今年(2016年)の7月には脊柱管狭窄症を患い、同センターの整形外科にもかかっています。息苦しさに関してはHOTを導入して何とか仕事をこなしていますが、脊柱管狭窄症による首や腰、両腕に感じる痛みはひどく、歩くのもやっとという時期もありました。それでも千葉県の自宅から東京の月島の職場まで日曜日・祝日以外は毎日、車で片道約2時間かけて通っていますので、私は根っからの仕事人間なのでしょうね。

機械に魅かれ活字鑄造の道に

私は新制中学校を卒業してすぐ、タイプライター用の活字の鑄造の仕事に就きました。そのきっか

けは新聞配達だったのです。当時は娯楽がありませんでしたから、夕方になると子供たちで連れだつてワイワイと銭湯に行くのが日課となっており、そこで新聞配達をしている友達に「お前は朝寝坊で朝が弱いから新聞配達なんかできないだろう」と言われました。負けん気の強かった私は「お前ができることはおれだってできる」と言い放って翌日には新聞屋さんへ行き、早速に新聞配達を始めました。新聞配達は朝3時半頃から仕事が始まるため、寒い日なんかは特につらかったですが、なんとか続けました。私の受け持ちの地域にタイプライター用の活字をつくる会社があったのですが、その職人さんが始発電車で早くから会社に出ていて、配達の際に言葉を交わすようになり、「今度、学校が終わったら遊びにおいで」と言ってくれました。私は亜鉛合金を熱で溶かして活字を鑄造する機械に興味津々で、機械みたさにその会社に放課後通うようになりました。1分間に40個ほ